



シャンダイア物語

第六部 統治の指輪

福田 弘生

Anima Solaris



第五十八章

『人間の詩』

エルガデル城の中庭にセルダンを降ろすと、竜のアンタルはエルセントの城壁の外に布陣しているマルヴェスタールを訪ねると言い残して飛び去った。

夕暮れの中庭に一人残されたセルダンは、城全体が唸っている事に気付いた。負傷者のうめき声が城全体から湧きあがるように大気を満たしているのだ。唇を噛みしめたセルダンの前に庭の茂みの中から二人の少年が現れた。

「やあベリック、アントン」

ベリックはホツとした顔で王子を見上げた。

「待っていましたよ、黒い冠の魔法使いはどうしました」

「倒した。だけど、存在は消えていないと思う。北の戦場で奇妙な出来事を見たんだ」

「奇妙な出来事とは」

「ああ、ロツティがソントールの第六の将パールの軍を撃破した。その後、戦場からパールらしき人物が消えた。ア

ントールは黒い冠の魔法使いの魂が関係したと思っている」

「それで魔法使いはこのエルセントにもう一度来ますか」

「いや、僕との戦いは終わったらしい」

ベリックがうなずいた。

「ならば僕らの敵はもう東の将とユマールの将の軍隊だけだ」

「いや、もう一体。黒い冠の魔法使いが操っていた巨獣が解放された、必ずここにやって来る」

「それではその前にライケン達と決着をつけましょう、と
ころで王子」

ベリックが言いかけると、アントンがおかしそうに横を
向いて背中で笑った。

「何だ」

「あなたがセントーン中に指名手配されているのを知って
ますか」

「ええっ、誰の命令で」

「この国の王女様です」

セルダンはうめいた。

「わかった、だがエルとの話は後にしよう、ベリック会議
室に皆を集めてくれ」

セルダンはそう言うのと煙に煤けた城の塔を見上げた。会
議室がある窓に人影が見える、レンゼン王とマスター・リ
ケルだろう。セルダンはその勤勉な二人を見ているうちに
希望が湧いてきた。

(大丈夫だ、まだみんな生きている)

.....

マコーキンの魂は戦場に戻っていた。マコーキンの魂が
不在の間にパールは敗北し、どこかに消えてしまった。マ
コーキンは自らの兵一万にパール軍の残り一万五千を加え
て二万五千の兵を率いてロッテイの後を追うように南下し

ている。しかしすでにこの軍にセントーンの状況に介入する力があるとは、さすがのマコーキンにも思えなかった。マコーキンは軍が休憩に入った時にミリアに問いかけた。

「私は何のためにセントーンに来たのだろう」

「もうあなたの役目は終わったのかもしれないわよ」

「タルミの里の出来事ですか」

「ええ魔法使いでは無いあなたにはよく理解出来ないかもしれないけれど、あれは大変な事だったの」

「再びあの力を使う事があると思うか」

「ええ、おそらく最後の決戦の時」

「場所は」

「グラン・エルバ・ソントールになると思う」

.....

ユマールの将ライケンは、ヤーン伯爵の海上軍をミルバ川から海に戻し、海上での物資輸送に専念させる事にした。キルティアがエルセントに火を放ち、食料などを灰にしてしまったからだ。

ライケンは腹心のミハエル侯爵にボヤいた。

「カインザーのロットエイ子爵はいつ頃エルセントに到着するんだ」

「おそらく二週間後かと」

「急がねばならないな」

椅子に座っていたライケンは立ち上がってテーブルの地に目を落とした。

「なぜだ、なぜこんなに手間取っているのだ」

「エルセントにこだわり過ぎたのかもしれませんが。セントーン全土を手中に収めれば、エルセントは捨て置いて枯れさせてしまっても良かったのではと」

「だがキルティアに取られるわけにはいかなかったぞ」

「そこでございます。キルティアの存在が我々の最大の障害だったのです」

ライケンは重々しくうなずいた。

・・・・・・・・

東の将キルティアの元には、マコーキンとパールの軍がロツティ子爵に敗れたという知らせが届いていた。

（残念だな、面倒な存在ではあったが、戦場に強い者がいるのは敵でも見方でも面白かったのに。しかしムライアツクを囲っていたとは、あの皇子は手に入れねばならん）

キルティアは美しい顔にふと影を落とした。

（レリーバもデッサもマーバルももう戻らない、わらわは一人になってしまったな）

・・・・・・・・

ロツティの軍はようやくエルセントまで二週間の距離に

辿りついた。

ロツテイの横にはマコーキンの元から助け出したアシユアン伯爵とマスター・モントが並んで馬を進ませている。サルパートのエラク伯爵は皇子ムライアックのお守で馬車にいた。

アシユアンが心配そうに言った。

「さてロツテイ、いよいよ戦場だぞ」

ロツテイは困ったように口をゆがめた。

「だが敵は城壁の中、市街戦では俺の騎馬軍団は役に立たん」

「ああ、意外な展開になった。まさかエルセントに敵がたてこもってしまうとは」

「しかもその大軍の真ん中にセルダン王子達がいるんだからなあ」

吹きつける風にはまた雪が交じり始めた、アシユアンが首をすくめた。

「寒いな、私は馬車に戻るよ。交渉が必要になったら呼んでくれ」

ロツテイはうなずいた。

「そんな機会があるとは思えないけどな」

.....

バルトールの暗殺者イサシは雪のチラつく平野に馬を進

ませていた。やがてぼんやりとかすむ視界の中に何かを見た。近づくとその奇妙な獣に跨ったパール・デルボーンだった。

「パール將軍、何をなさっているのですか」

パールはゆっくりとイサシに目を向けた、その目にはゾツとする黒い闇が見えた。

「行くぞ、付いて来い」

パールはゆっくりとそう言った。

「はい」

イサシの口から自然にそう返事が出た。イサシはパールと共に西へ、グラン・エルバ・ソントールへ向かって馬を向けた。

(第六十章に続く)

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_/chandaia/index.shtml

とうち ゆびわ
統治の指輪 — シャンダイア物語 —

2009年11月15日 第1版第1冊発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。